

審査の結果の要旨

氏名 林 炯延

図書館情報学において公共図書館の児童教育機能とは、よい資料を提供することに加えて、読み聞かせ、ストーリーテリング、ブックトークなどの働きかけを通じて本好きな子どもを育てるところにあるとされてきたが、教育学的な検討に乏しかった。本論文は、学習理論をベースに著者が米国の図書館で観察したことを踏まえて新たに読書教育プログラムを作成し、韓国において実施したプロセスを記述・評価することで、公共図書館が教育機能を積極的に果たすための新しい方法を提案したものである。

第1章では、公共図書館の歴史的・法的位置づけをもとに教育機能を検討しようとする本論文の背景を述べた。第2章では、公共図書館の児童教育機能に関する先行研究をレビューし、韓国では生涯学習政策の進展に応じてインフォーマル教育の場としての公共図書館が注目されていることを述べ、続く第3章では、児童読書教育の場として公共図書館を取り上げる理由を公共図書館がもつサービスの公共性の観点から検討し、学校図書館との差異についても言及した。

第4章、第5章では新しい読書教育プログラムをつくるにあたって、構成主義教授学習理論の観点を導入するための理論的な考察を行った。個人の内面の自我省察に焦点をあてた認知構成主義と、学習者と教授者、学習者相互、学習者と学習環境などの外的な側面に焦点をあてた社会構成主義を検討した上で、両者を相互補完的に扱い、学習者の好奇心と持続的な探求心を維持しつつ、学習効果を高めるための学習者－教授者－学習環境の相互関係を重視する読書教育プログラムモデルを作成した。

第6章では、アメリカのボストン周辺の公共図書館の読書教育プログラム実践を観察することを通してこのモデルがよくあてはまっていることを確認し、第7章では韓国の公共図書館の読書教育プログラムで行われている実践をこのモデルの観点から分析・評価した。第8章では、アメリカの学校で実施されている読書教育プログラムをこのモデルに照らして検討しつつモデルの有効性の検討も行った。第9章は、著者自身がソウル市の公共図書館児童室において構成主義学習理論に基づくプログラムを準備しこれを長期間実施したうえで評価した過程を記述したもので、各学習要素別の観察をもとに読書教育としての効果が上がったことを実証している。第10章では、以上の結果をまとめたうえで、韓国の図書館関係機関に対して本論文が示唆する諸点について述べた。

著者は、長年、家庭での読書振興や公共図書館での児童サービスの運営に関わり、現場での実践活動を続けてきた。本論文では、そうした豊富な経験に裏打ちされた実践意識が教育学における学習理論を応用した読書教育プログラム構築に活かされている。児童図書館のもつ教育機能を検証しこれをより効果的に実現する方法を具体的に提案した本論文は、博士（教育学）に値するものと認められた。